# 斜陽の訪れ

◉

葛岡昭男

兜町の記者クラブは、金曜日の午後になると、にわかに閑散としてくる。
市場の取引は来週の月曜日までしかないから用がなくなるのだ。早々に引きあげて、映画を見に行くのもいれば、近くのゴルフ練習場へ行くのもいる。残っているのは、麻雀卓を囲んでいるか、内職原稿を書いているかである。
産業日報の小山は、麻雀卓に座っている一人だった。すでに二時間近く座っているが、負け続けであった。たまにいい手に恵まれるが、そういう時は自摸が悪く、ようやくリーチをかけたかと思うと、千点の安上がりで流されてしまうといった調子だった。ついていないときは仕方がないもので、焦れば焦るほど、負けがふえていた。すでに、ポケットの中にある金では、足りなくなっている。全くついていなかった。麻雀と人生とは違うが、といって、まったく違うとはいえないような気もする。人生についていないときは、麻雀にもついていないのではあるまいか。つきと云う点では、両者の間に共通するものがあるようにも思える。小山は、ある意味では、落ち目に入っていた。
つい三日ほど前に、彼は部長に呼ばれ、異動の内示をうけていた。
香川県の高松支局へ次席として行け、というのである。小山は、東京本社の経済部記者である。地方支局であれ、次席という肩書がつくのだから、形の上では昇格ということになる。だが、小山にとっては、それは事実上の左遷であった。
東京生まれの東京育ちである小山にとって、まずそれは「都落ち」でもある。また昇格によって月給が多少は上がるかもしれないが、地方へ行けば、週刊誌などの内職原稿がなくなる。収入は実質的には減ってくるわけだった。仕事の面でも、つまらないし、やる気がなくなる。証券市場を担当していることは、いわば日本経済を相手にしているにひとしいが、地方支局は県内ニュースが相手である。たとえていえば、歌舞伎座の千両役者から田舎の芝居小屋に変わるようなものだった。
はなやかで投資家に喜怒哀楽させ一喜一憂させるニュースは期待出来ない。といってこれは業務命令を拒否することは出来なかった。いやなら、辞めるほかないのである。妻子をかかえて、辞めることは出来ない。分譲マンションの返済もまだ十年近く残っている。そういうことを考えると麻雀でついていないのも、当然かも

知れなかった。
「きょうは調子が出ないようだな」記者仲間のひとりがいった。「うむ」小山は、場を見まわしてから、高い音を立てて「北」を切った。ドラの「発」が暗刻になって、やっとテン牌になった。
「あ、それだ」大木が牌をさらした。単騎待ちの国士無双に打ち込んでいた。
「場に三枚出ているので、最期の一枚はヤマの中かと思っていたよ」役満を完成した男は、にこにこして説明していた。
原が小山をたずねてきたのは、その半チャンが終わって点棒の計算をしているときだった。小山はもちろんビリだった。
交替を待っている者がいるので、小山は、ひとまず抜けることにした。何しろ、つきはドン底なのである。
抜けて風向きの変わるのを待った方がよさそうだった。「一時間したら戻ってくるからな」小山はいった。「ああ戻ってこいよ。ついでにネギをしこたま背負ってきてくれ」「何をいいやがる」小山はいいかえして、席を立った。入り口のところに待っていた原が、「どうやら不調のようだね」と小声でいった。
「最低だね」小山は記者クラブを出て、行きつけの喫茶店に入った。原から電話があって、午後にでも会いたいといってきたのは、その日の朝だった。原は、小山とは学生時代からのつきあいだった。
大学を出たとき、原は大きな証券会社に入ったが、いまでは、そこを辞めている。三年前に、小山が証券担当になったとき、原はすでに独立していた。
独立していたというと、いかにも聞えがいいが、実際は小さな証券会社を根城にしている地場のひとりだった。いわば一匹狼といってよかった。凄まじい勘の持ち主でもあった。
といっても、一時代前に比べると、こうした一匹狼の数はぐんと減っていた。
証券市場も大手の会社の力が格段に強くなっていて、地場の活躍する場所はすっかりせばめられている。狼というほどの威勢はなく、せいぜい猫くらいであった。だが、猫には猫なりの生き方がある。
原はその生き方が性に適っているようだった。それなりに情報をつかんで、ときには儲け、ときには損しているらしい。小山はコーヒーを注文してから、「このところ、どうなんだい？」「楽しくしかも元気でやっているかい」といった。挨拶代

わりの質問だった。「まあまあ、といったところだが……」原はあいまいに答えてから、こんどは表情をひきしめていった。「きみに折り入って、相談したいことがあるんだ」「何だい？」「その前に聞いておきたいが、東京を離れて地方支局へ転勤するそうだな」と原が顔色をうかがうようにいった。

小山は、自分の表情がこわばるのを自覚した。部長から内示のあったことを、小山は同僚の誰にも喋っていなかった。辞令が出るのは早くても来月であり、まだ二週間も残っている。その間に、社内の有力者に運動して、この話をないものにする可能性も残されているのだ。部長と小山との間だけの話にとどまっていれば、必ずしも不可能ではないが、公になった場合は、流すことは出来なくなる。人事とはそういうものであったその内密の話が、どうしても局外者の原に漏れたのか。

「変なことをいうなよ。気になるではないか、何かの間違いじゃないのか」

とっさの判断で小山はいった。原は「心配しているんだよ。隠さなくてもいいじゃないか。相談というのは、それと関係があるから聞いているんだ」といった。

「誰がきみにそういうことをいったんだ？」

「誰だっていいじゃないか」

「そうはいかんよ。誰がそういったのか、教えてくれ」「そういう話があったのは、事実なんだろう？こだわるようだが、もしそれが事実でないならば、この話は、するだけ無駄なんだ」「わかった。たしかに、そういう話のあることは認めよう。しかし確定したわけじゃない」「消える望みはあるのかね？」「あるさ」と小山は自分を励ます気持ちで答えた。

「ある、というよりも、ないとは思いたくないというのが正直なところじゃないのかね」原は、小山の胸中を見すかすようにいった。「いずれにせよ、きみには関係のないことじゃないか。おれがどこの部署に変わろうと、きみの知ったことではあるまい。それより、誰がきみにそんな話をしたのか……」「ネタをあかすよ。きみの奥さんから聞いたんだ」「女房から？　あいつ！」

小山は拍子ぬけした。同時に、そのような秘密を他人にもらした妻の淳子に腹を立てた。原とは古いつきあいであるにしろ話していいことと悪いこととあるのだ。

「そう怒りなさんな。彼女の方からおれに進んで喋ったわけじゃない。思いついたことがあったんで電話をかけたら、その話がわかってきたんだ」「まあ、いい。それで君の話というのは何だ？」「一発ヨタ記事をかましてくれないか」「なに！」「謝

礼は二千万円だ」「バカな」「ふざけて話しているわけじゃないんだ。現金で二千万円だ。きみが承諾してくれれば、あすにでも持ってくる」小山はすぐに返事ができなかった。何かいいたかったが、のどの奥で声が圧し潰されている感じだった。

小山の長男、政司は私立の有名高を卒業したが運悪く付属高に在席しながら、大学への推薦から漏れてしまいその年外部より受験したが不合格であり、今春再度受験したが失敗に終わった。今、苦しい浪人生活を余儀無くしていた。来年度に夢をかけている政司は苦しい二浪の身でもあり妻の淳子はこの一人息子に全身全霊の極みでのぞんでいた。

小山の心中には仕事と家庭の悩みが大きくのしかかっていた。表情にこそ出さなかったが辛苦の重さは極限値に達していた。そんなことを知らない原の表情は恐ろしいほどに真剣であった。

小山が記者クラブに戻ってみると、帰るものがいて、麻雀のメンバーがひとり足りなくなっていた。「ちょうどいいところに帰って来た。さあ、入れよ」さっき、小山から役満を奪った男が彼を誘った。原から聞いた話で、正直なところ、麻雀どころではなかったが、夜七時に、もう一度彼と会うことになっていた。原がある人物を小山に引き合わせる予定だった。それまで時間も余っていたし、負けを少なくしておきたかったのである。「よし」小山は麻雀卓に座った。頭の中がいっぱいになっていることがあるので、勝てるという気はしなかった。むしろドン底まで落ちてやれという自棄気味の気分であった。だが、小山は恐ろしいほどの「つき」に恵まれた。その半チャンで、大三元と四暗刻をやりとげたのであった。「いったい、外へ出て、何をやってきたんだい？」

「本当にびっくりするではないか」

「さっきの小山君といまここにいる小山君とは、もしかすると別の人間なんじゃないかね」負けた三人は、口ぐちにいった。当然のことながら、もう一回ということになった。次の回でも小山はいぜんとして好調であった。役満こそ出来なかったが、荘家の時にハネ満と倍満を上がって、再び圧勝した。午後の負けを回復したばかりか、かなりのプラスに転じていたのである。「いったい、どういうことなんだ？」負けたもの達が首をかしげ、「よし、もうあと半チャン」と叫んだ。

「駄目だ。人と会う約束がある」

「つきが回って来たんだ。キャンセルすればいいじゃないか」「いいから精算して

くれ」小山はにべもなく拒否した。たしかに、「つき」が回って来たのである。それは原が運んで来たとしか考えられなかった。

原との約束をキャンセルすることは、その「つき」をもキャンセルすることになってしまう。小山は、かき集めた金をポケットに入れると記者クラブを出た。不思議といえば不思議であるが、原の来訪が、どうしようもないドン底から小山を救い上げたことは確かであった。人生には、しばしばそのようなことが起きるものなのだ。喫茶店で原からその話を聞いた時には、小山は、どちらかといえば乗り気ではなかった。二千万円の報酬は、相当な魅力である。記者を続けている限り、そのような大金を手にすることはないだろう。定年の折、退職金で手に出来る位のものである。その定年まで小山はドサ回りで過ごす可能性もあるのだった。再び本社へ戻ってこられるという保障は何もなかった。

どこか地方の小都市で、定年を迎えることだってありうるのだ。そうなったら、どんなに寂しいことだろう。

人事異動、やはりサラリーマンにとっては生涯最大の関心事である。激しい産業構造の変化と技術革新の嵐、低成長と減量経営、転勤といえば以前は栄転と相場が決まっていたものだが今は左遷といわないまでも単なる横すべり異動であり、決して昇進の早道ではない。四十代、五十代の単身赴任は四人に一人。うつ病にかかったり、思秋期の妻たちの反乱に会って、人生に暗いかげを落としているサラリーマンも結構多いのである。ましてそれが左遷ともなると、再起どころか本社の基幹部門に無事生還できるだけでも僥倖であり、それも十人中たった二人か三人といわれている。そうならないためには、異動の話を何とかして流さなければならないが、見込みはほとんどないのだ。原には、ある、と答えたものの、それは弱っている気持ちを見すかされたくないためだった。そういうことを考えると、いまかりに二千万円で他の仕事に変わらないか、と話を持ち込まれれば、地方行きよりも、そちらを選びそうであった。小山はまだ四十三歳だった。転職はいくらでもきくのである。大新聞の記者ばかりが男の仕事ではない。

しかし、原の持ってきた話の最大の難点は、ヨタ記事を書くということだった。ヨタ記事にもいろいろとある。おもしろくするために誇張したり脚色したりするのもヨタ記事なら、事実に反したデッチあげもある。前者の方がまだしも罪が軽い。どんなヨタ記事を書いてくれというのか、くわしい話は聞いていないが、その代償

が二千万円というのなら、たんに誤報といってすまされない性質のものであろう。むろんその記事が事実に反していることは、やがてわかるに違いなかった。そうなれば小山は責任をとって、退職せざるを得ない。依願退職ならまだしも、免職処分も考えられる。

ジャーナリストにとって、ヨタ記事のために免職になるというのは、不名誉この上もなかった。その烙印は一生ついてまわるに違いなかった。まして、金をもらって書いたとあれば卑劣な男ということになる。事実を見誤っての誤報とはわけが違ってくる。

だからこそ、二千万円もの大金を出そうというのであろう。小山はひそかに悩んだ。小山は、原をどなりつけて、即座に断っても良かったのだが、あえてそうしなかったのは、この話のプロモーターとくわしい内容を知りたかったからであった。

原が単独で二千万円を出す能力のないことは明白だった。彼は誰かの指示を受けて動いているのだ。小山にはヨタ記事を書いてもらう場合、彼が株式市場を担当しているからには、その関係のニュースになることは見当がつく。彼が財政や国家予算のニュースを書くことはない。記者の仕事はそれだけ分業化している。また小山に二千万円を出すからには、出す人間は、それを上回る利益をあげるはずであった。二億円か三億円か……。

彼の書くニュース（もちろんデッチあげの）によってある株式の価格がかりに百円の変動をみせたとする

百万株動かせば、利益は一億円である。二百万株で二億円。それをやるには、資金も必要である。一株百円ならば百万株で一億円だ。ただし、信用売買の銘柄ならば、銘柄によって差はあるが、三分の一程度の証拠金を用意すればいい。

原は一匹狼ではあるが、場合によっては、狼が群れをなすこともある。そういう時には、必ず中心になるボスがいる。それ相当の資力と勝負度胸をもっている男でなければ、そのボスにはなれない。そのボスがこの話のプロモーターでもあるのだ。だから小山は原と七時に再会する約束をして別れたのだが、その一方では、自分の内部にひそんでいる弱さにも気がついていた。

不徳義な記者というレッテルを貼られるのはつらい。この上もない恥辱でもある。がそれは社内でのことである。社外の人にまでわかることではない。二千万円を資金に何か別の商売をするのであれば、ほとんど関係のない傷である。うらぶれた地

方都市で定年を迎えるのと、どちらがいいか。小山は考えざるをえないのであった。一喝の下原を追い払うことをしなかった裏には、そういう気持ちがひそんでいたのではないか。（ともかく原のボスに会ってみることだ）と小山は自分に言い聞かせたのである。原は、先刻の喫茶店の前に立っていた。このあたり店はたいてい六時には閉店する。そのかわり、開店時間も早い。客は証券関係に限られているのだ。

原は小山の姿を認めると、手をあげてタクシーを止めた。

「本当にこの話のプロモーターに会わしてくれるんだな？」

「ああ」

「どういう人物だい？」「もうすぐ会える。会えばわかるさ。ぼくの説明を聞くより、自分の目で確かめればいいことだ」

「それはそうだが、その人物の経歴とか資金量は、会っただけではわからないからな。きみから聞いておきたいのだ」

「その不安はわかるがね。しかし二千万円は誰が出しても二千万円だ。その値打ちが提供する人によって変わるわけじゃない」

「金だけの問題ではない」「というと？」

「おれが二千万円を手にしても、そのために一家心中する人が出てくるというのでは、こっちはたまらんからな」「そういう心配は全く必要ないよ」「おれが二千万円だとすると、きみの儲けはその倍くらいか」「とんでもない。二千万円どころか、その半分もない」「おかしいじゃないか」「おかしくはない。きみには大新聞の株式担当という地位がある。おれには、それがない。せいぜい、提灯をつけて、儲けさせてもらうだけのことだ」その時、タクシーは築地にある小ぢんまりした料亭の前にとまった。

原が先に立って入った。奥の座敷に通された小山は、はじめ、そこに座っているのは芸妓かと思った。三十代位のすらりとした美人であった。ちらりと見上げたまなざしに、思わず胸のときめきを感ずるような女っぽさがあった。

芸妓ではないことは、着ている和服や、指輪やハンドバックからすぐにわかった。原が少しあらたまった口調で紹介した。

女性は、笠原千代子と名のった。しかし名刺は出さなかった。相手が出さないのに、自分の方が出すことはなかった。それに、彼の方は産業日報の記者であることは、はっきりしているのだ。相手は、笠原千代子という名が、本名かどうかも、こ

とによると疑わしいのである。
「じゃ、ぼくはこれで」原が腰をうかした。「帰るのか」と小山はちょっぴり驚いていった。「うむ。話は笠原さんからうかがってくれたまえ」原はそれだけいって、千代子の方へかるく会釈を送り、帰って行った。
「何か召しあがります?」と千代子がいった。「ビールでもいただきますか」「お酒はけっこうお強いのでございましょう?」
「弱い方ではないですね」「では、スコッチでも」「いや、ビールで結構です」
いやにきっぱりした言い方になっていた。
おれはやはり緊張しているな、と小山は思った。千代子はそれ以上はすすめなかった。女中に注文を出してから、きょうは少しむし暑いなどといった。上品な大島紬にオストリッチのバッグである。指には肉の厚いヒスイの指輪が粋を感じさせた。千代子はビールを一口飲んでから、「この女は何者だろうと、と考えていらっしゃるんでしょうね?」と少しうちとけた調子でいった。「ズバリそのとおりですね。あえていうならば、お聞かせいただいた名前が本名がどうかも考えているところです」「千代子は本名です。でも笠原というのはわたしの姓ではございません。といって無関係ではありませんが……」
「難しいんですね」「いいえ簡単ですわ。籍が入っていないというだけのことですから」「つまり、事実上のご主人がいらっしゃるということですか」
「新聞社の方はいつもそうやって戸籍調べをなさいますの?もうよろしいではございませんか」千代子は微笑をうかべた。すべてをふわっとやわらかく包んでしまうような微笑であった。小山は、気持ちを引き緊めた。
「戸籍調べをするつもりはありませんが、なにしろ意表外のことでしたからね」
「そりゃ、二千万円で記事を書いてくれだなんて、まともなお願いではありませんものね」「それもそうですが、そのプロモーターがまさかあなたのような女性だとは夢にも考えていなかったから、意外というかびっくり仰天というか……」「どういう人間だと予想していらっしゃいましたの?」「原の属している一発屋の親玉だと考えていましたよ。もっとも、近ごろでは、昔と違って、一発屋の数はめっきり減ってきましたからね。カルテル化に象徴される日本経済の体質は、根本で国際化と相入れないところがあります。個人より集団の利益、家庭を省みず会社に尽くす猛烈サラリーマン。経営者はその中の優等生なんだから、日本集団主義の権化とな

るのは当然のことでございましょう。めぼしい一発屋のことを考えてみたのですが、これはというのが思い当たりませんでした」

一発屋は、鉄砲屋とも呼ばれた。偽情報を一発かまして相場を変動させ、それに乗じて儲ける場合もあるし、大きくドンと張り込んで失敗したらそのまま姿を消す相場師のことをいう場合もある。いずれにしろ、市場の波間にうかぶあぶくのような存在だった。証券市場がいまのように近代化される前には、けっこう数も多かったのである。

いまでも、いることはいる。だが、昔に比べると、単純な一発屋は生存できなくなっている。大手の証券会社の力が強くなり、情報網が完備されているいまでは、相場自体が動かしにくくなっているのだ。

「私は一発を狙っているわけではございませんの」「じゃ、何を狙っているのです？ぼくに、故意に誤報を書かせて、どうしようというのです」「いま申し上げられません」「しかし、あなたは、ぼくに二千万円を提供しようとしているんでしょう？」「はい」「それはつまり投資ではありませんか。当然のことながら、その投資に見合うだけの利益がなければならない」「たしかに、見合うものがあるとはいえます。でも、それが金銭的利益を意味するとは限りませんわ」

「金銭的利益以外のものというと、何ですか」「さあ、何でしょうか」千代子は、はぐらかした。怒るに怒れなかった。小山には千代子との間に距離を感じて、黙ってビールをのんだ。相手が、用心深くカモフラージュする気持ちもわからないではないが、先方の防備の堅さに比べると、小山の方はいわばノーガードであった。これでは、対等の取引とはいい難いのである。その気持ちを千代子は敏感に察知したようであった。「説明不十分の点は、本当に申し訳ないと思います。でも、いまはお赦し下さいませんか。いずれは、申し上げる機会がくると思います。それより、お引受けいただけますでしょうか」

「それに答える前に、教えてくれませんか。どうしてぼくを選んだのです？」

原さんからうかがったのです。東京を離れたくないのに、転勤の話が出ているとかいうことで……」「二千万円では少ないとは思いませんか。ぼくは産業日報記者の職を失うようになるんですよ。それだけではない。信用も失ってしまうんです」「額については二千万円というのは、かりに申し上げただけなのです。小山さんがそれで満足なさるとは考えておりませんでした。もしご希望の額があれば、おっしゃっ

ていただきたいと思いますわ。また、お仕事についても、さしつかえなければお世話させていただこうと考えておりますの」「なるほど」小山は再びビールを飲みながら、この女はいったい何者だろうか、とあらためて考えた。金を持っていることは確かだった。だが、それが彼女の金かどうかはわからない。話の様子では、笠原という男と夫婦同然に暮らしているらしい。その笠原が金を持っているのかも知れない。千代子自身は、おそらく水商売の出であろう。しぐさに、何ともいえない女っぽさがある。かつては新橋とか柳橋とかで名妓とうたわれた女なのではあるまいか。いずれにせよ、この女はどうやら笠原という人物の何からしい。想像になるが、笠原という男が芸妓を落籍せて身のまわりの世話をさせているのではあるまいか。

口ぶりからは、それらしい様子がうかがえる。この想像があたっているとすると、真のプロモーターは笠原ということになる。

小山はその想像をたしかめたくなった。小山はもとより好奇心の強い男であった。「率直にいいましょう。二千万円とはずいぶん安く値をつけられたな、と思っているんですよ」転勤ということで小山も真剣であった。しかも四国の高松市への転勤は思ってもいなかったからなおさらであった。千代子はうなずき、「その点はおわびいたしますわ。人さまのせいにするつもりはございませんけれど、原さんがそのへんの金額ではないか、とおっしゃるものですから……」

「彼はこの話にどっぷり首までつかっているんですか」「そうですわね、ちょっとお答えしにくいのですが、でも申し上げますわ。原さんにはご内密にして下さいませ。首まで、ではなくて、せいぜい膝小僧くらいでしょうか」「膝小僧ねえ。すると、ぼくはせいぜい足首程度になるのかな」千代子は笑った。

小山はその顔を美しいと思った。彼は、女の容姿や肉体に心を動かされることはない、と自分では自信をもっているつもりだった。人には語ったことはないが、苦い経験があったのだ。自分というよりも、心を動かされてはいけないという自戒といった方が適切かも知れなかった。

それが今崩れかけている。彼は、神話の魔女シレーヌを思い出した。

故郷への船旅を急ぐ船乗りたちに、シレーヌは美しい歌を聞かせる。その声を聞いたものは、我を忘れてシレーヌに誘いこまれ、殺されてしまうのだ。それをさけるためには、耳をふさぐしかない。で、シレーヌはのちに警笛の意味にもなった。英語のサイレンがそれである。シレーヌに勝てたのは、英雄ユリシーズだけであっ

た。小山は自分をユリシーズに比するつもりはなかったが、船乗りたちの気持ちもわかるような気がした。誘い込まれてならぬことは百も承知であった。耳をふさぎ、からだを船柱に縛りつけておくのがもっとも安全確実なのだ。

そうすれば、故郷へ無事に帰ることが出来る。六十歳の定年まで無事に勤めることができる……。ここ東京の兜町や大阪の北浜は、「しま」とも呼ばれている。シレーヌはエーゲ―海の島に棲んでいた。この女は兜町のシレーヌではないのか。小山はビールをのんだ。千代子が、からになったグラスに注ぎ足した。その手を小山は押えていった。「金」は二千万円でもいいでしょう。だが、それだけでは、ぼくは動かない。ぼくが欲しいのはあなただ」

一週間たった金曜日の朝、小山は山川証券の株式部長である吉川の部屋へ行った。吉川は、株価の変動を示す電光掲示板へ目をやりながら、誰かに電話をかけている。小山の姿を認めると、かるくうなずいてみせ、机の前の椅子を示した。

「……わかりました。ではまた」吉川はそういって電話を終えた。小山はいった。「どうですか、寄付のぐあいは?」「予算も成立したことだし、このあたりで全般に戻ってくるんじゃないですか。今週は仕方がないとしても、来週あたりから、そろそろ本格的な相場に入ってくれないことには各社ともお手上げですよ」

「日曜日の朝刊用の株価展望を書くので取材してまわっているんだけれど、どうもいい材料がなくてね。吉川さんの所でそろそろ本腰を入れて相場を作るというような話も小耳はさんだが、本当の所は、どうなんですか」「そう思っているのは、うちばかりではないでしょうか」「それじゃ、やるんですか」「いやいや、いまのは希望的観測も入っているわけで、本腰をいれなくとも、まだその時期がきているかどうか……」「T石油なんかどうです?かなり騰げてきているようだけれど」「この十日間で百円あげていますね」と吉川は掲示板に目をやり、「でも、大相場になるかどうか、わたしは疑問に思っているんですよ」「だって連日一千万株の大商内が続いているじゃないですか。きのう年初来の高値を記録したから、きょうはさすがにゆるんでいるが、五百円の大台までふきあげるという説もありますね」「常磐沖の試掘で、原油層を確認したという噂が材料ですからね」「そこに問題がある。まあ、くろうとはいいですよ。思惑で勝負したってかまわない。しかし大衆投資家にそれだけのネタで、我々が勧めるわけにはいきませんからね」

「会社はマスコミの取材にはノーコメントだけれど、ああいうのはやはり問題です

ね」

そのとき、吉川の卓上の電話が鳴った。

彼はそれをうけてから「社からですよ」といって、電話を差し出した。小山は受取った。「はい小山です。いま取材しているところで、夕刊が終わりしだい……え？いや、聞いていませんよ」彼は掲示板を見渡したのち、「百五十一円の一円高ですね。ふうん・・・じゃ、ちょっと待って下さい。聞いてみます」といったん電話を耳からはなし、吉川にたずねた。「横河通商の幹事証券は、どこでしたかね？」「うちと東日証券さんですよ」小山は再び電話に向かっていった。

「たしかめてみますよ。じゃ」吉川は、百五十一円の寄り値を示している横河通商のグラフを見てから「どうしたんです？」といった。横河通商はたしか南米の方で、石油の開発プロジェクトに三億ドルか四億ドルを投資していましたね？」三億五千万ドルですよ。はじめ二億五千万ドル、あとから二億ドルを追加したんです」「その融資をうけている開発公社が危ないというニュースが入っていないか、という問合せなんですがね」

「いや、聞いていませんな」「横河通商の投資は回収不能じゃないかっていうんだが……」「まさか！」吉川は一笑に付すようにいった。しかしその表情は鋭くひきしまっている。そして「産業日報さんの特派員からの報告ですか」とたずねた。真剣な口調だった。

「たしかめなかったが、そうでしょうね」

「何かの間違いだと思いますね」

その時開示版の横河通商の株価は、一五一から一五〇に変わり、すぐ一四九となった。

「ちょっと失礼」吉川は席を立った。「じゃ、あとで」小山は急いで吉川の部屋を出た。彼は記者室に戻ると、横河通商の役員室へ電話をかけた。社長、専務は不在だった。存在しているのは、常務のひとりである小川という人物だけだという。「もう十時を過ぎているじゃないですか。きょうは休みというわけじゃないんでしょ。いったい、どこへ行っているんです？その小川さんでもいいから、電話に出してくださいよ。え、産業日報です……会議中？　いつその会議は終わるんですか……仕方がないな！」小山ハ電話を切った。

その時、キャップの杉本が現れた。「どうしたんだい？」「いやね」小山はタバコ

に火をつけてから声をひそめ、横河通商が南米に投資した三億五千万ドルが、回収不能らしいという情報なんで、会社側に確認しようとしているんですが、社長も専務も不在だというんですよ。週刊展望の取材で山川証券の吉川のところにいたら、電話がかかってきて……ともかく、横河通商へ行って、取材してきます」

「社長に連絡したかい？」「まだです」「じゃ、こっちからしておこう。なるべく早く連絡を入れてくれ」「ええ」小山は上着をわし掴みにして、記者クラブを出た。タクシーを拾い、京橋にある横河通商の本社へいった。役員室秘書課な課員は、社長ら幹部は、けさの便で成田から東南アジアへ出発した、といった。「東南アジアのどこ？」「ジャカルタでございます」秘書課員は、見送りにも行けない下っ端のようだった。居残っている小川という常務は、機械担当だというが、小山は面会を求めた。秘書課員は渋っていたが、小山は強引に会った。小川は、電話中だった。それが終わると、小山の前にきて、「何か……」「もうお察しでしょうが、南米の三億五千万ドルの一件で」「わたしは、担当ではありませんので、いますぐここでは確かなお答えはできかねますが、そういうことは、あり得ないと思います」「おたくの現地駐在員は、たしかサンタクルスにいるんでしたね？」小川はうなずいた。「そっちから何かいってきていませんか」「まだ何も」「問い合わせてはいるんでしょう？」「ともかく、そういう報告は入っておりません」「入っているとかいないではなくて、問い合わせているのかと質問しているんですよ」「ともかく……」電話がけたたましく鳴った。小川はそれをとり、低い声で応答した。小山の存在を気にしている様子だった。小山は、間もなく電話をすませた小川に、担当部長に会わしてほしい、といった。「ちょっとお待ち下さい」小川は部屋を出て行った。入れ違いに、他社の記者の佐々木が入ってきた。

「社長も専務もいないらしいね」

「ジャカルタへ行ったそうだ」「で、どうなんだい？」「担当じゃないから、責任のあることはいえないというんだ。そこで、担当部長に会わせろと要求しているんだが……株価はどうなっている？」「おれが出てくるときは、百四十四円だったな」小山は時計を見た。十一時だった。前場の引けまで、あと三十分である。前日の終値より六円安で、このくらいの変動は、よくあることだった。

小山は佐々木に訊いた。「おたくは、南米に特派員はいたっけね？」「いることはいるが、いまブエノスアイレスだからな」「吉川のところへ行ってみた？」「やっこ

さん、席にいないんだ」おそらく真偽を確認するために、とびまわっているに違いなかった。

横河通商は大手の商社であるにしても、三億五千万ドルの投資が回収不能となっては、一大事である。約七百億円のこげつき債権を抱え込んだのでは、容易ではない。つぶれないまでも、痛手を被ることは間違いなかった。

その時、主のいない卓上の電話が鳴った。秘書室から女子社員が出てきて、それをうけた。やはり、問合せの電話のようだった。

それが終わるのを待って小山は、「小川さんはどこへ消えたんだい？　困るじゃないか」

「はい、ただいま」彼女は怯えたようにいった。小山は佐々木を残して部屋を出た。担当が海外開発部というセクションであることは、前もって調べてあった。部長は席にいなかった。小山は、残っている部員に取材をこころみたが、すべて無駄であった。予期したとおりに事は運んでいた。あとはいかにして仕上げるかである。小山は記者クラブに戻った。「どうだった？」杉本キャップが待ちかねたように声をかけてきた。

「株価はどうなっています？」「百四十一円まで下げている。五百万株の成り行きの売りが出ているそうだから、もっと下げるだろう」「やっぱり」「じゃ、本当なのか」

「社長、専務ともいないんですよ。残っているのは、機械部門担当の小川という常務だけで、その小川も、ぼくが取材している間に、姿を消してしまいましてね。心証としてはクロですね」「社長や専務はどこへ行ったんだ？」「旅行中だというんですが、事実か否かは、つかめなかったんです」

「要するに、ノーコメントなんだな」

「ノーコメントというより小川は、サンタクルスの駐在員からそういう報告が届いていないというだけなんですよ」「逃げているわけだな」「ともかく原稿を書きますから、目を通して下さい」「よし」杉本とうなずいた。小山は机に対して、原稿を書き始めた。横河通商の三億五千万ドルの投資が事実上回収不能となり、同社の首脳部は、対策に苦慮している、というのが骨子である、あとは、株価の動きを付け加え、投資契約の内容を要約した。それだけで、約六十行の記事になる。夕刊としてはじゅうぶんだった。杉本はざっと読んでから、「かなり断定的だが、大丈夫かね？」と、いくらか不安げにいった。「大丈夫ですよ。他社の連中も取材にきてい

ましたが、常務ともあろう人間が、姿を隠してしまうんですから」「それもそうだな」杉本は、本社デスクとの直通電話をとりあげた。金融ルールのあるべき姿への確立はまた、企業の資本構成の是正は、さらに資本市場（社債、株式の両市場）の機能が、円滑に発揮しえられる基盤のうえではじめて可能なのである。特に日本経済のごとく、旺盛な発展段階にある場合においてそうである。午後になって、後場の市場が再開されると、横河通商の株価は、再び売りを浴びて下落した。回収不能の噂は、兜町全体にひろがっていた。株価は群衆心理に支配されやすい。そうなると、売り方はいっそう強気になる。ふつう、このような場合、幹事証券が買い支えるものだが、山川証券も東日証券も、売りこそしないものの、買いにまわろうとしなかった。それが下げ足をいっそう早めた。後場の終わり値は、百十一円に下がった。一日で五十円の暴落である。横河通商本社で、記者会見が行われたのは、午後四時だった。小川常務が、短いコメントを発表した。彼は三億五千万ドルの回収不能説を否定し、かりに万一そのような回収不能が起きたとしても、投資に見合う担保をとっているから、心配はない、というのである。

会見に出ていた小山は質問した。

「社長や専務とは、連絡がとれたのですか」

「いえ、まだです。しかし、今夜中には連絡がつきます。

なにしろ、ジャカルタ着が日本時間の午後六時半ですから」

「サンタクルスの駐在員へは、問い合わせたんでしょうね？」

「もちろん、問合せしました」「何といってきているんです？」

「そういうことは、絶対にありえないという報告です」「融資を受けている現地の開発公団の責任者がそういっているんですか」

「そうだと思います。」「思いますというのでは、困るんですよ。駐在員は、本社から問い合わせがきたから、否定しているだけじゃないですか。南米と日本とでは、十二時間の時差がある。つまり、問合せが届いたのは、真夜中になるわけですね。これじゃ、確かめようがないはずでしょう」

「それは……しかし、問題が重大ですから、真夜中でも出来ないことはないと思います」と小川は苦しそうにいった。追いつめられてパンチを浴びているボクサーのように、元気がなかった。別の記者が新しい質問を出した。確保してある担保は何かと訊いたのだ。

小川はいくらか救われたようになった。
「それはここにリストがあります」彼は、持参した書類をひろげた。小川はそれを機会に席をはずした。すでにサイコロは投げられたのだ。朝刊の記事も回収不能で押し通すしかなかった。彼は横河通商の本社を出ると、原の待っている喫茶店へ行った。「たったな」原は昂った口調でいった。
「うむ」
「いやに落ち着いているじゃないか」
「いや、そうでもない。こっちも興奮はしているさ。しかし、それを表に出したところで仕方がない。おれとしては、問題はこれからだからね」「きみは、昔から、そういう勝負師的な冷静さがあったからな、羨ましい限りだ。おれなんか、そうはいかない」
「ところで、いくら儲けた?」「かき集められるだけ集めたんだが、三百万円しか用意出来なくてね」「いくらで買い戻した?」
「百二十円だ」小山は計算した。信用銘柄なので、三百万円あれば、ざっと五万株の取引が出来る。百五十円で空売りし、百二十円で買い戻したから、一株の利益は三十円。五万株で百五十円になったわけである。
「きみは?」と原が訊いた。「おれはやらなかったよ」「どうして?絶対に儲けられるチャンスだったじゃないか」「こんなにうまく事が運ぶとは思っていなかったからね」小山はそう答えたが、それは事実に反していた。彼は千代子からもらった前金の五百万円をそっくり注ぎ込んでいた。この金額を証拠金にすると十万株の売買が出来る。小山は百五十円で前日に空売りしており、引け際に百十一円で買い戻していた。その差額は約四十円。ざっと四百万円の儲けだった。それを喜んでいる原にいうのは、気の毒のような感じだったのである。「そいつは、もったいないことをしたな」「まあね」「で、情勢はどうなんだ?」「各社ともジャカルタに特派員がいるから、今夜中には、社長の否定談話が入ってくるだろうな」「南米の方は?」
「日本の特派員はサンタクルスにはいないが、外国の通信社は置いている。それも、記事を送ってくるだろうから、あすは、揉み合いになるね。あすは金曜日で、立会は今週も終わりだ。勝負は週明けの寄付きの三十分から一時間で決まりそうだな」
「しかし、社長の否定や外電だけでは、回収不能説を一掃できないだろう。もうひと押し、あるんじゃないかね?」「どうしたらいいと思う?」「自分で決めることだ」

小山はつきはなした。
それから彼は、公衆電話で、杉本に連絡をとった。「おい、きみを捜していたんだ。いま、どこにいる？」「横河通商の本社を出てきたところです。原稿を送りますよ」「その前に、ちょっと聞いておきたいことがあるんだ」（きたな）と小山は心の中で呟いた。「何です？」山川証券の吉川から聞いたんだが、この情報のネタはきみだそうじゃないか」「吉川がそういっているんですか」「そうとも。きみが本社の特派員電報がきているとか言って、彼にぶつけたんだというが、それは事実なのかね？」
吉川と話をしている時、電話をしてきたのは、原であった。原が、本社のものだ、と吉川にいったとしても、小山自信は、本社からの情報だとは一言もいっていない。開発公社が危ないというニュースが入っているが、といっただけなのだ。吉川は前後の状況から、特派員情報だと思いこんだのである。そこへ大量の売りが出た。吉川はそこで錯覚しのだ。
小山は、どうせ責任をとらされる。その前に辞職する決心をしているが、いくらかでも救いを残しておきたかった。
吉川が冷静であれば、錯覚せずにすんだはずなのだ。
「杉本さん、ぼくは、特派員電報がきたなんていっていませんよ」
「じじつ、外信部にそんな電報は入っていないものな。何といったんだ？」
「こういう情報があるが、といっただけですよ」「しかし、きみは吉川の目の前で電話をうけたそうではないか」「ええ、じっさい、ぼくの友人が電話してきて、教えてくれたんです。彼は、クラブに電話したところ、ぼくはいなかった。ぼくは給仕に、吉川のところに取材に行っているからと言い残しておいたので……」「そういう弁解はともかく、きみの友人というのは、どこの人だ？」「横河通商の社員です」「名前は？」「いえません」「何をいってるんだ。おれは、キャップなんだぞ。社外の人間に洩らすわけじゃあるまいに」杉本は怒りを含んだ声で激しくいった。「悪いが、誰であるかは、いえませんよ。長いつきあいの友人を守る義務がありますからね」
「その気持ちはわかるが事は重大なんだ。誤報ということになれば、このままではすまされない」「むろん、百も承知ですよ。責任はとります」と小山はきっぱりといった。
企業の要求と、個々の従業員の目標や欲求とを完全に統合することは、現実には

とても実現できない目標であることは無論である。
この原則をとろうとするときは、どの程度の総合を図れば、従業員が企業の繁栄のために努力しながら、自分の目標を実現するのにいちばんよいかを知ることが大切である。「一番」というのは、他のやりかた、たとえば無関心、無責任、渋々ながらの不服従、敵意、怠情といったやり方より、このやり方のほうが従業員に魅力的であるということである。
従業員は絶えず自発的に自分の能力、知識、技術、手腕を高め、かつ実地に活かして企業の繁栄に尽くそうとするようになるということなのである。
喫茶店を出ると、車を拾って、都心にあるホテルへ行った。フロントで聞いてから千代子の部屋の前に立った。
ドア・ブザーを鳴らす前に、小山は呼吸をととのえた。すべては、原が訪ねてきたときから、はじまったのだ。ドサ回りの話をもち出されて、小山はどん底にあった。つきには見放されていた。だが、あのときから流れが変わった。麻雀でも、続けざまに役満を上がったではないか。大新聞の記者という職を棒に振った、と人は見るかもしれない。だが、ドサ回りをしてまで、しがみついていたくはなかった。安定した月給と希望のない日々とひきかえに生きる気はしなかった。扉の向こうには、美しい生きものが待っているのだ。それだけでも、賭けるに値するではないか。
小山はブザーを鳴らした。ドアが開かれた。千代子が立っている。小山は後ろ手にしめると、千代子の肩に腕をまわし、強く抱き寄せて接吻した。千代子はからだをくねらせてから、小山の腕をのがれた。
「待って」「待たない」「どうしてそんなに急ぐのですか?」と千代子はたしなめた。
小山は苦笑した。ベッドには、どっしりとしたカバーがかかっていた。
千代子はバッグから、封筒を抜いて、小山に渡した。「残りの分ですわ」小山は改めもせずに、ポケットに放り込んだ。
「どうもありがとうございました」と彼女がいった。「いやに、改まった言い方をするね」「だって、本当なのですもの」「五百万株の売りを浴びせたのは、あんただね。それにしても、いいタイミングだった。あれで、はずみがついた」「終わり値は百十一円でしたわね」「そうだった」うなずいてから、小山は胸の中で計算してみた。五百万株を百四十円で空売りしたとして、ざっと一億五千万円の利益である。あす、こんどは買いにまわれば、さらにそれは儲かるのだ。

「後悔していらっしゃるんじゃありません？」「いや、後悔なんかしていない。原には黙っていたが、ぼく自身、きょう一日で四百万円ちかい利益をつかんでいる。あすは、この五百万円を足して買いにまわる。元金と合わせて三十万株は買える計算だから、一株三十円とみても、九百万円になる。二日で千三百円だ。あんたの利益に比べれば、ちっぽけのものだが……」

「これから先、どうなさいますの？」

「明日の朝、辞表を出す」小山は自分にいいきかせるようにいった。一週間前には考えてもいないことであった。しかし、世の中は何が起こるか、わからない。この女ともそうだ。一週間前には、彼女が地上に存在していることさえ知らなかったのだ。それがいまはどうであろう。ホテルの一室で二人だけで会っている。手をのばせば、食べることの出来る果実がある。小山は手をのばして、再び千代子に接吻した。今度は彼女も応じて唇を合わせた。「いいね？」「あなたは、欲が深いのね」「どうして」「金あけでは足りずに、女まで求めるんですもの」「他の女なら、求めはしない」「殺し文句がお上手なのね」

「わからないのかね。本当のことをいっているまでだ」小山は腕に力をこめた。

「わかっわ。私も決心しています。でもここではいや」「じゃ、どうすればいい？」

「あす、この街を離れましょう」「逃げはしまいね」「逃げるくらいなら、残りのお金を持って、ここで待ってはいませんわ」「わかった。それじゃ、今夜は帰る」

小山はうなずいた。翌朝、彼は、妻の淳子には数日間出張してくるといって家を出た。

行きがけに辞表を投函したのち、取引している小さな証券会社に寄って、成行きで横河通商に買いを入れるよう注文した。

「大丈夫ですか。きょうの新聞だと、まだ下げそうですよ」

「かわまん。買ってくれ」

小山は現金を渡してから羽田へ向かった。国内線のロビーに着いたのは、十時ちょっと前だった。すぐに、千代子が姿を見せた。和服ではなく、洋装だった。「洋服も似合うんですね」その声が弾んでいるのを、小山は自覚した。「どこへ行こうか」「どちらでも」「じゃ、北海道へ行こう」千代子はうなずいた。札幌に到着したのは、正午すぎだった。機内で、千代子はほとんど口をきかなかった。眠っているわけではないが、目をとじていた。ホテルへ入ってから、部屋の中で食事をとった。ゆっ

たりとした気分だった。
「人生って不思議ね」と千代子がいった。
「本当だ。あんたはぼくのことを欲ばりだといったが人間は、誰しも欲ばりなんじゃないかな。ただ、その欲望に賭けるか賭けないかそこが岐れ路だと思うな」
「きのう、おっしゃっていたように、そっくり注ぎ込んだんですの？」
「もちろんだ。あんたは？」「わたしは、きのうだけです」
「もったいないな」
「いいんです。はじめに考えていただけのものは手にしたんですから」「理屈はそうだが……」小山はテレビをつけた。ニュースの時間だった。前日に続く波乱をとりあげるはずであった。ニュースがはじまった。
簡単に政局のニュースを流したあと、アナウンサーは、南米でクーデターが起きたことを放送し、その関係で、横河通商の三億五千万ドルの投資が回収不能になったことを告げ、「……このため、東京株式市場では、前日に続き横河通商株は大幅に値下がりし、終わり値は三十六円安の七十五円となりました。また、外国へ旅行中の同社首脳陣は、急ぎ帰国の途に向かい、到着次第ただちに対策を協議することになっております」としめくくった。
小山はこめかみのあたりが燃えるように感じた。千代子がそっと手をのばして、テレビを消したことにも、気がつかなかった。
三十万株の買い注文を出しているのだ。
月曜日になれば、もっと下がるだろう。注ぎ込んだ千三百万円が、そっくり消える計算だった。
小山は立ちあがって洗面所へ行き、冷たい水で顔を洗った。ほかにどうしたらいいのか、思い浮かばなかった。鏡に映っている小山の顔は、精気がなかった。欲望と欲望のぶつかり合う社会で、全てを失った男の顔だった。
マスコミ記者としての頂点で活躍した小山にも、斜陽のおもかげがありありと伺えた。
ドアの音が聞えた。千代子が出て行ったらしい。小山は追いかけようとして、思いとどまった。追ったところで去る意思をかためているなら、無駄であろう。見ていられなくて席をはずしただけなら、戻ってくるはずである。（おい、どっちに賭ける？）小山は鏡の中の自分に問うた。気のせいかいくらか精気が戻ってきたようで

あった。鏡の中の自分を見つめているとき、息子政司の再起をかける浪人生活の辛さが心の中にすき間風を吹かせた。

完

第10回文芸思潮銀華文学賞 入選受賞作品

**葛岡昭男（くずおかあきお）**

元証券マン・作詞家・エッセイスト。日本歌人クラブ会員・新アララギ短歌会同人。日本音楽著作家連合会員。著書：『珠玉の政治思想』（鹿島出版）、『ゆくりなくも』（鶴書院）『岳父と枝豆』（鶴書院）、『蘇生の槇』（鶴書院）『私の母物語』（日本文学館）。受賞：文部大臣賞、読売新聞社賞、流山市長賞 他。Eメール：kuzuoka@fan.hi-ho.ne.jp